

『ビリー・エリオット』 製作発表レポート



【ほとばしるエネルギー！ビリーは生きる喜びの象徴】

ミュージカル『ビリー・エリオット～リトル・ダンサー～』製作発表が2月17日(土)クラブ eXで行われた。記者やカメラマン、そして抽選で選ばれた一般オーディエンスが駆けつけ、会場は熱気に満ち溢れていた。2017年日本初演、2020年再演、そして3演目となる今回。前回、2020年の際はコロナ禍で日程が半分に減り、海外クリエイターの来日が不可能だった中で敢行された奇跡の公演。それから4年が経ち、長期にわたるオーディションで1000人を超える応募者の中から選ばれたのが浅田良舞、石黒瑛土、井上宇一郎、春山嘉夢一。

ついに新たなビリーが見られるのだ。

主催者代表挨拶では、ホリプログループの堀義貴会長が、これまでの日本のビリーたちの活躍について言及。バレエコンクールで活躍する人、K-POPアイドル、東大生、バトントワリング世界大会優勝、海外留学、高校の音楽科へ進学した人など、みんな高みを目指して今も頑張っているという。

ビリーの精神がご本人の中にしっかり息づいていることに驚き、感動してしまう。

次に4人のビリーによる「エレクトリシティ」のパフォーマンスが披露された。イギリスのロイヤルバレエスクールを受験したビリーが、面接官から踊っている時の気持ちを聞かれ、その思いを表現する名場面。通常は一人で踊るが、この製作発表のために4人編成の特別バージョンとなっている。

バッグを斜めがけしたビリーたちが登場すると、ああ、これだ！と鳥肌が立った。「うまく言えません」の歌い出しだけで心が震える。最初はソロを繋ぎ、コーラスへ。4人が一緒に「ぼくは、

もう自由！」と叫び、ダンスが始まった。『白鳥の湖』のアレンジされたメロディーに乗せて、技が次々と繰り出される。いやはや、みんな上手いなあ！素晴らしいのは、きれいに整えて歌う、踊るというより、気持ちを思う存分乗せてのびのびと表現。エネルギーがほとばしるところだ。最後の連続ピルエットでは、挑む一人のビリーに周りのビリーたちが頑張れ！と励ます。そんな団結や連帯を感じさせるのもこの作品ならでは。何より、パフォーマンスから見えるバレエへの情熱、夢に向かうひたむきさ、努力し高みを目指す尊さ…。ビリーは生きる喜びそのものの象徴なのだ実感し、すっかり目頭が熱くなった。早く本番が観たい！



質疑応答では、あれほどのびのびと踊っていたビリーたちが緊張気味で、その初々しさが可愛らしい。大人キャストたちが、マイクをとってあげるなどお世話していたのも微笑ましかった。

作品の大ファンで特別番組のナビゲーターを務めてきた綾瀬はるか、そしてトニー役の吉田広大、オールダー・ビリー役の厚地康雄の映像コメントがあり、最後はビリーたちの熱い決意で締め括られた。

『名前にも込められているように良く舞いたい！』(浅田)

『常識を打ち破るビリーになりたい！』(石黒)

『お客さんを楽しませられるよう、エネルギーを出す！』(井上)

『希望を与えられるようなビリーになりたい！』(春山)。

彼らが更なる夢を掴み取り羽ばたく姿が待ち遠しい。

2024年の『ビリー・エリオット～リトル・ダンサー～』、絶対に見逃せない。

(文:三浦真紀)